

将来の豊かなキャリアは 学生時代の気付き次第



株式会社トーセは、誰もが名前を知っているような有名なものを含め1,100タイトルを越えるゲームソフトの開発を手がけ、1979年の会社設立以来26年間、右肩上がりの成長を続けています。そんなトーセを設立当初から率いるのは、立命館の卒業生でもある代表取締役社長・齋藤 茂氏。充実した大学生活を送り、自分の希望する進路を決定した2名の学生が、齋藤社長を訪問。私たちを取り巻く社会の情勢や、厳しいビジネス社会で活躍していく秘訣についてうかがいました。

父親の経営する企業から独立 23歳で新会社の舵取り役に

平井 ここ数年、景気動向は回復の兆しを見せ、各企業の新卒採用状況も上向きつつあります。2004年度の立命館大学生の就職状況も、例年以上にめざましいものでした。一方で“ニート”と呼ばれる若者が社会問題になるなど、若者の定職離れが深刻化しているのもまた現実です。こうした問題の一因として、職業観の未成熟が考えられます。働くことの意味を十分に理解しないままに就職活動をし、そのまま社会に出たため、仕事に充実感を得られず、自分の生き方に合わないと感じて早期離職してしまうケースも多く見受けられます。希望の進路や就職を実現するために、学生には低回生のうちから働くことの意義について考えてほしいと思っています。

齋藤社長は、株式会社トーセの社長として長年に渡り、企業を成長させてこられました。ご自身はどのようにキャリアを形成されたのか、また現在、企業経営者としてどんな人材を求めておられるのかをお聞かせ願いたいと思います。まず現在に至る経緯をお聞かせください。

齋藤 私も中学から大学卒業までの10年間、立命館で過ごしました。いずれは父親の経営する株式会社東亜セイコーに入社し、父親の跡を継ぐものだと考えていましたから、職業選択に迷う余地はありませんでした。ところが、入社して半年後に、業務用ゲーム機製造を副業で営む東亜セイコーから分離し、ゲームソフトの開発を行う会社を新たに設立することとなり、私がその舵取りを任されたのです。当時私は、23歳。無我夢中でソフト開発と企業経営に乗り出しました。マニュアル本を片手に企画書を作り、自ら作曲やデザインもこなした日々の苦労は、今も忘れられません。それから26年、順調に業績を伸ばし、2001年には東証一部、ならびに大証一部上場を実現。ゲームソフト、モバイルコンテンツの開発、制作請負会社の最大手に成長しました。

就職は、過程にすぎない。 その後の選択や成長が重要

平井 本日同席しているお二人は、目的意識を持って学業や課外活動に取り組み、充実した大学生活を送り、希望通りの進路を決めました。

まず、これまで、学生生活をどのように過ごしてきたのかお聞かせください。

田中 入学当初の私は、自分が将来どんな仕事に就きたいのか、よくわかりませんでした。選択肢を見出すためには視野を広げる必要があ

ると思い、プリティッシュ・コロンビア大学(UBC)と立命館大学とのジョイントプログラムを活用してカナダに留学したり、2社でのインターンシップを経験したりしました。職業を選択する際に役立ったのは、インターンシップです。ひとつにはテレビの番組制作などを手がける株式会社先駆舎で、アシスタントディレクターの業務に携わりました。仕事は、想像以上に過酷でした。早朝から深夜まで仕事に追われる激務の中でも常に前向きに、主体的に仕事に取り組むことが求められます。ずいぶん精神力が鍛えられました。また三菱商事株式会社のインターンシップにも参加しました。そこでは実

在する国を題材に、その国で成功するビジネスモデルを構築し、プレゼンテーションするという課題に取り組みました。この2度のインターンシップを通して気付いたのは、働くことの厳しさや、世界を舞台に仕事をしたいという気持ちでした。それが進路決定につながったのです。**中世古** 私は高校時代からマスコミ業界に憧れていました。マスコミへの就職者が多いと聞いたことも、立命館大学へ進学した理由のひとつです。在学中に放送についての知識やスキルを身につけたいと思い、RBC(立命館大学放送局)に入部。番組制作やイベント統括に関わってきました。けれど活動を続けるうちに、マスコミを志望する気持ちが揺らぎ始めたのです。誰も考えつかないようなことを発想し、新しい番組を作るといった「0を1にする」ことが、得意ではないと気付いたからでした。それよりは、既存の良いものを多くの人に伝えることの方が向いているのではないかと。そう考え、就職活動ではメーカーの販売促進業務を志望しました。最終的には、放送の知識と自分の適性の両方を生かせる株式会社テレビ朝日のビジネス部門に就職を決めました。

齋藤 お二人ともよく考え、行動した結果、進路を決定されたと思います。あえて助言するならば、就職は、あくまで過程であるということです。むしろ社会に出てからどんな仕事をし、どう成長するかが重要です。たとえ希望の企業に入社したとしても、望んだ通りの仕事に就けるとは限りません。その時、会社を辞めるのか、与えられた仕事に全力で取り組むのか、希望の仕事ができるよう社内で実力をつけたり、人脈を育んだりする努力をするのか。判断を求められる場面に幾度も遭遇することだと思います。私自身、企業を経営する立場になって、数えきれないほどの岐路に立ち、その都度、選択してきました。その選択の結果が、現在につながっているわけです。働くこと自体の意味を考えず、就職そのものを目的にしてしまっている人は、社会に出た後、現実とのギャップに苦しむことになるかもしれません。

適性に気付くのが早いほど 将来のキャリアの幅が広がる

平井 適切な職業を選択する力量をつけ、社会で活躍するためには、何が必要だとお考えですか。

齋藤 本人が自分の取り巻く社会状況や自分自



齋藤 茂 さん
(さいとう・しげる)

株式会社トーセ代表取締役社長
1979年立命館大学理工学部卒業

身の関心、適性にできるだけ早く気付くことです。早く気付いた人ほど、将来のキャリアの幅が広がります。採用する側としてもいろいろな工夫をして自社に適した人材を発掘しようと努力しています。

平井 御社は「諸葛孔明発掘プロジェクト」という、中国から優秀な人材を登用するユニークな試みを行っておられますね。また新入社員の採用も、アルバイトとして働く中で周りからの推薦により適性を確かめるなどの人材発掘における工夫が現在の成長につながっているのだと思います。

さて、早い段階から自分の適性に気付いてキャリアをデザインし、将来に備えるには、どうしたら良いのでしょうか。

齋藤 「気付く」上で最も重要なのは、情報です。情報を手に入れる手段を数多く見つけることが、職業選択の上でも、また将来に渡っても、最大の武器になります。情報には、デジタルとアナログの2種類あると言われます。デジタル情報は、インターネットや携帯電話などのモバイルから簡単に入手できます。しかしこれには、手に入れた情報が必ずしも正しいとは限らないという欠点があります。私が大切にしているのは、アナログ情報です。たとえば私は毎日日本屋へ行きます。どんな本がどう並べられているか、占有面積や場所を見ることで、世の中のトレンドがわかります。人脈も同様です。信頼できる人を見つけ、ネットワークを構築する努力を怠りません。自分で見る、聞く、経験することで得られるこうしたアナログ情報こそ、判断や行動の成功率を高める手立てとなるのです。大学



中世古 裕美 さん
(なかせこ・ゆみ)

政策科学部政策科学科4回生
株式会社テレビ朝日内定



田中 良 さん
(たなか・りょう)

産業社会学部産業社会学科4回生
石川島播磨重工業株式会社内定





将来の豊かなキャリアは
学生時代の気付き次第

時代にも、アナログ情報を得るための努力をすることが大切だと思います。

大学時代の課外活動の中で
リーダーシップを培う

平井 23歳の若さで企業のトップとなり、会社を牽引するには、相当のモチベーションやリーダーシップが必要だったことと拝察します。社会へ出て活躍するために、学生時代に何かしておくべきことはありますか。

齋藤 課外活動を含め、あらゆる経験が役に立ちます。学生時代、私は茶道研究部の副部長として、渉外を担当しました。京都市内の50以上の寺を訪ね、茶会の催しを依頼する経験を通して交渉術を養い、またメンバーをまとめる中でリーダーシップを培うことができました。社会に出てからも、青年会議所のブロック会長や京都産業21理事などを務めてきました。こうした金銭的な利害関係のない組織でリーダー的な役割を果たすことは、リーダーシップを養う貴重な機会です。学生時代は、こうした経験を積み絶好の時期といえます。

平井 学生のお二人は、正課・課外活動などで自分が成長したと感じた経験はありますか。

田中 私はESS（英語研究会）に所属しています。英語弁論大会を開催した時、マネージャーとなり、大会運営を任された経験は大きかったですね。さまざまな役割のスタッフをまとめ、全体を統括するのが私の役目でした。物事の先を読み、判断する力がついたように思います。

中世古 2回生の秋の学園祭でのことです。学園祭事務局とRBCが協力して、「ウルトラクイズ」というクイズ企画を実施することになり、

私は企画進行の統括を担当しました。スタッフが持ち寄る企画を一つひとつ吟味し、折衝しながら構成を練り上げていきました。目標にしたのは、スタッフ全員に主体的に参加してもらうこと。そのために私自身が率先して考え、提案するよう心がけました。スタッフ一人ひとりが高いモチベーションを持って積極的に参画し、当日、盛況のうちにイベントを終わらせることができた時には、一回り成長したような気がしました。

トレーニングを繰り返して
国際感覚、柔軟性を養う

平井 社会人の先輩として、働く上で必要な知識や心構えをお教えてください。

齋藤 情報と経済の国際化、ボーダレス化は、ますます進んでいます。外国に対する知識と理解は、今後さらに不可欠なものとなるでしょう。日本にとって最も脅威であり、またビジネスチャンスでもあるのは、中国です。近年の中国の急速な経済成長は、周知の事実でしょう。もし12億4000万人もの国民が、今以上に経済的に豊かになったら、アジアの農作物供給事情は一変するに違いありません。巨大な隣国の影響は、あなた方が想像している以上に細部に渡って及ぶものなのです。国際社会に視野を広げ、関心を深めておくことは、これからビジネスに関わる者にとって、必須だと思います。

田中 私が留学していたカナダのUBCには、世界各国から来たさまざまな民族の学生が学んでいました。彼らと机を並べながら、私は「グローバル化が最も進んでいるビジネスの世界では、こんなことは当たり前になってきているの

だらうな」と、思ったものです。今のお話を聞いて、国際感覚や情報の必要性を改めて感じました。

齋藤 またビジネスには、柔軟性も求められます。たとえば当社では、開発したゲームソフトが海外で大量にコピーされ、安価に販売されているという問題を抱えています。深刻に受け止めてはいますが、現状でそれを防ぐのは困難です。だから私たちは、違法コピーによる損害を宣伝費、あるいは投資と捉えようと考えています。違法コピーを逆に利用することで知名度を上げ、他商品の販売で損失を回収する方法を探ろうというわけです。このように発想を転換した時、新しい可能性が見えてくることもあるのです。

田中 そうした発想の転換は、どうしたら可能になるのでしょうか。

齋藤 トレーニングすることです。ひとつには相手の立場になって考えること。コピーされることは当社にとっては頭の痛いことですが、相手の立場になってみれば、その要因や社会背景が見えてきます。こうしたトレーニングは、一朝一夕で成果が出るものではありません。当社でも社内研修をしたり、さまざまな書籍を読ませたり、継続的に社員教育を行っています。また常に問題意識を持つことも重要です。問題の中にこそ、発展の可能性が秘められているのです。問題意識を持たない人は、飛躍の可能性を前にしても気付かずに通り返してしまいます。問題を認識し、解決することを繰り返す中で、人も、ビジネスも、成長するのです。学生の皆さんも、向上するために努力する姿勢を忘れないでほしいですね。

働く中で得られる喜びとは
苦しんだ末に得られる充実感

平井 学生の二人は、会社に入ってからどのように働いていきたいと考えていますか。

中世古 先述のように、私は0を1にするのは不得手です。けれどそれをポジティブに捉えて仕事に活かしていきたいと思っています。

齋藤 0を1にできるクリエイターは、日本には非常に少ないのが現状です。新しいものを生み出すには、時間がかかります。長いスパンで新しい可能性に出資する投資家が存在し、クリエイターを支える土壌のあるアメリカなどと異なり、日本の真骨頂は、1を2に、さらには100にすること。社会や企業もそれができる人材を求めています。「1」を「2」に増やす重

要性を認識している中世古さんは、きっと企業にとっても力強い戦力となることと思います。

田中 私もいつかは、齋藤社長のように世界を舞台に活躍していきたいと思っています。将来的には一國の発展をも左右するような大きなビジネスに関わることが目標です。

平井 これからキャリア形成、就職活動に臨もうとする後輩に、お三方から激励の言葉をお願いします。

中世古 早く行動することが大切だと思います。自分は何をしたくて、何に向いているのか。自己分析を早い段階からしておく、いざ就職活動を始めた時に迷わずに済みます。齋藤社長のお話を聞いて、その思いをいっそう強くしました。

田中 何も情報を得ないうちから、自分の夢や目標にこだわり過ぎないことも必要ではないでしょうか。目標に固執することで、自分の適性や本当にしたいことを見失うことも在り得ま

す。自分の可能性を決めつけず、まずは興味のあることにどんどんチャレンジしてほしい。そしてたくさんの選択肢の中から自分の適性を見極めてほしいと思います。

齋藤 私は、学生時代にできるだけ見聞を広めることをおすすめします。そのためには、まずアクションを起こすこと。何もしなければ、自分の適性に気付くこともできません。正課の授業、課外活動、様々なことに積極的に取り組んでほしいと思います。

平井 最後に、働くとはどういうことなのか。齋藤社長の考えをお聞かせください。

齋藤 働くことは、一般的には苦しみの連続です。働いているより遊んでいる方がずっと楽に違いありません。けれど誰かが働かなければ、地球は成り立たない。働くことは、人間にとってひとつの責任なのです。社会人と学生との決定的な違いも、そこにあります。学生は養われる立場である一方、社会人は、働くことで誰か



【司会】 **平井英嗣**
(ひらい・ひでつぐ)
キャリアセンター次長

を養う責任を負わなければならないのです。また責任を伴うからこそ、苦しみを乗り越えて目標を達成したり、自分の成長を実感したりした時に得られる充実感は、何にも換え難いものになります。働くとはそういうことなのです。

